

## 【チバニアンの前段階】

……………梵蔵たかちゃん(高田 俊一)の空想

### 《宇宙に磁性の強い元素が出来る話》

◇大元の宇宙は、何も無い本当の“無”であった。

- ・ビッグバンという理論上の発火点から、+のエネルギー世界と、-のエネルギー世界に、別れてしまったとか？
- ・私達の居る現在の宇宙は、+のエネルギー世界で、物質世界と考えられる。
- ・そうすると、-のエネルギー世界という、反物質の世界が考えられることになる。

◇中国の古代思想で、宇宙は“太極”であり、“陽”と“陰”の要素に分けられる考えに似てくる。

◇私達の宇宙は、何も無い訳ではなく、エネルギーが充満していたと考えられる。

- ・小柴昌俊博士が発見した、ニュートリノなどの多くの素粒子が飛び廻っていた。充満と書いたが、非常に希薄な状態だった。
- ・ビッグバンという、発火点から、衝撃波のように、素粒子がぶつかり合い、陽子や電子、中性子になり、更にぶつかり合って原子になり、引力が発生して物質として集まり始め、ブラックマター(暗黒物質)として集まり、渦を巻きながら、熱を発して恒星化してくる。
- ・こんな状態が無数に出現して、数多くの銀河が出来る。銀河の中には無数の恒星があり、その周囲には、恒星に達しなかった無数の惑星や岩塊、塵、ガスが回っている。

◇恒星の中心部では、軽い水素原子からどんどん核融合を起こして、質量の大きな元素が作られていく。炭素原子や酸素原子、更に大きな原子である鉄やニッケルなどが出来る。

◇それが超新星の爆発で、再び宇宙に拡散してしまう。

これが繰り返されると、宇宙には質量の大きな元素や小さな水素など様々な元素が分散してしまうことになる。

- ・そして、それらは引力を持っているので、又又、集まり始めるのです。

### 《地球に磁場が出来る話》

◇その様な粗密の中の密の部分の極く一部分が、太陽系となり、渦巻きの中心が太陽となり、周囲を廻る円盤状の丁度良い位置に地球があったのです。地球の質量で太陽に引っ張られ落下する力と、円盤上を公転する遠心力が偶然釣り合う位置だったのです。

- ・更に偶然が重なり、水という物質が丁度液体に居られる極く僅かな温度範囲だったのです。
- ・始めは集まっていた小惑星位の岩塊が夫々の引力でくっつき、大きくなった引力で周囲の岩塊を次々と引っ張り込み、衝突を繰り返して、やがてその衝突のエネルギーでどろどろに融けた熔岩の塊として地球の原形が出来たのです。
- ・その中には、重い元素も多く含まれ、それらは重力の作用でどろどろの原地球の中心部へと沈んでしまいます。このため地球の核となる中心部分には“鉄”や“コバルト”“ニッケル”などの磁性を持つ重い金属が集まっているとされます。

◇まだ液体状態なので、核内では温度差や重量差により対流状に流動しており、地球の自転の影響で、磁性流体の対流が捻れてコイル状態になり、あたかも電磁石のコイルのような役割となり、電磁誘導により地球に磁場が生じ磁力が発生します。これが地磁気の原因と考えられています。

## 《地球の表層部に磁性金属が存在する話》

- ◇普通は核の中は一定の流れが生じ、安定していたが、地球の表面が冷えて大陸が出来ると大陸同士は地殻下の熔融流であるプルームの影響を受け離合集散を繰り返します。
- ◇地球が少し冷えてくると、融けた熔岩の表面が固化して、皮のような原始大陸が出来ます。
- ・そして、熔岩に含まれていた水分(宇宙に散っていた時から岩塊に氷や結晶水として付着)が蒸発して、厚い雲となり、雨となって地表を更に冷やしていきます。
  - ・そして、海と大陸の原形が発生します。
  - ・重い元素である鉄などは地球の中心部に集まり、軽い元素で地球の皮が出来始めていた頃地球が移動して行く途中で、太陽系の円盤上に惑星に成り切れなかった岩塊群の中に突入して、再び巨大隕石が地球上に降り注ぐことになりました。そして固まり掛けていた地表の大陸などは隕石の落下のエネルギーで、再び熔けて火の球になってしまいました。
  - ・この時に、岩塊に含まれていた鉄などの重い金属は、固まり掛けていた地球の内部深くまで沈むことはなく早く冷やされて、現在の鉄鉱石のように地表近くに多く存在しているのです。もちろん他の有用な金属類も地表近くで集まり、鉱床を形成しています。
  - ・そして、少しずつ冷えて、海が出来、大陸が生まれたのです。
- ◇しかし、地球は核よりは外側だが、地殻よりは内側の内部はまだ流動している熔岩が対流を続けており“プルーム”と呼ばれています。地表近くに出てきた熔岩の流れは“マントル”と言います。
- ・普通は核の中は一定の流れが生じ、安定していたが、地球の表面が冷えて大陸が出来ると大陸同士は地殻下の熔融流であるプルームの影響を受け、離合集散を繰り返す。

## 《磁場が変動する話》

- ◇さて、話を大きく戻します。太平洋の中央部から湧き上がる、地球内部のドロドロの熔岩流マントルは、太平洋の海底を西へ移動して、ユーラシア大陸の岩盤と衝突し、日本の東側で地殻の中、大陸の下へ潜り込んで行きます。これが日本海溝であり、マリアナ海溝などです。すると大陸など地殻の下では、冷えた塊が溜まって巨大になっていきます。
- ・元々大陸などの地殻はドロドロのマントルの上に浮いた皮のようなものですから、その下に巨大な塊が溜まると、塊は自身の重さでマントルの中を沈んで行くと考えられています。
  - ・そうした時、地球の中心部の核の近くまで落ち込んで行った時、その重みとか衝撃とか、温度差などにより熔融流も乱され、更に重い金属から構成されている核の中の帯磁性流体の流れも乱されてしまう。そして電磁石のような働きも乱され、地球の磁場も変動してしまうのだそうです。
  - ・すると、今迄磁性流体として一定のコイル状態の流れで作られていた、地球磁場に狂いが生じ、時には**磁場が非常に弱くなったり**、**北磁極と南磁極が入れ替わったり**、**移動してしまうことがあるのです**。
  - ・逆転すると言っても瞬間的に入れ替わる訳ではなく、その前には地磁気が弱まったり、元に戻ったり、逆転したりする不安定な期間が数千年間から数万年間も続くのです。
  - ・地質年代は、何万年とか何百万年という単位の時間軸です。

## 《地球の磁場が弱くなったり、逆転するとどうなるのか？》

◇私達の住む地球には地磁気という、地球そのものが磁石になってしまう現象があり、地球には運良く相当に強い磁場が作られました。

このお蔭で、この地球の磁場は、地表面に影響を及ぼすよりも遙かに強く地球の周囲にバリケードやガードの網を張って、強烈な宇宙線の多くをブロックして直接地表に届かないように地球を護ってくれていたのです。

仮に磁場が出来ていなかったら、太陽から噴き出してくる、物凄い勢いの太陽風によって、地球の大気も剥ぎ取られ、荒涼とした岩石惑星になっていたでしょう。

もしも、地球の磁場が弱まったり、無くなったりしたら、太陽風と呼ばれる超高速の荷電粒子や超強力な紫外線等に加え、宇宙からの激烈な宇宙線は直接地球上に降り注ぎ、地球上のあらゆる生命体など、とても存在できる環境では無くなるのです。地球に磁場が出来なかったら生命は存在していなかったでしょう。

大気圏には先に宇宙線などが当たり、そうすると、大気を構成している成分が荷電粒子などによって、帯電すると、そこに水分が凝結して微少な水滴が数多く出来ます。

## 《磁場の変化は、気候の極端な変化を惹き起こす》

◇まあそこまで行かなくても、途中で磁場が弱まると、バリケードで防御していた荷電粒

子や紫外線、宇宙からの強大な宇宙線は、ブロックを<sup>かわ</sup>躲して地球の大気中に降り注ぎ、大気を荷電させ、水蒸気を凝結させて、上空に雲を作ります。するとその雲によって太陽からの恵みの光や熱も同時に遮断されるのです。全天が長期間、雲に被われれば地上には陽が当たらず、冷え切って氷河期となってしまいます。

- ・また、地磁気の変動するということは、地球内部の熔融流体の流れも異常となり、同時期に巨大火山の噴火などが相次ぎ、火山灰が上空を覆って陽が差さず、極端な寒冷化が来てしまう場合もあります。

つまり、地磁気の変動は、生命の歴史にとって非常に大きな変革期となる訳です。

- ・そして、現在も磁極の動きが大きくなり、その変動期に差し掛かっているという説もあります。ただし、人間の一生のスケールと、地質学的な尺度とは、全く異なります。十年先か、百年先か、千年先か、一万年先か、十万年先か全く判りません。
- ・こういう氷河期がくると、生物界は壊滅的な打撃を受け、生物を基本とした時代区分も変わります。生命体の多くは絶滅していくのです。運良く生き残った生物が、次の覇者 となって、その繰り返しにより、現在の地球環境が出来てきたのです。

オーロラなども、バリケードの隙間を潜り抜けてきた僅かな荷電粒子が磁極のある北極や南極の上空の大気に衝突して光を発する現象なのです。

## 《日本列島の誕生》

◇湯葉のような皮が流動しているマンツルの表面に大陸として出来ても、浮遊しているので形は定まらず、大陸は何回も離合集散を繰り返し、やっと現在のようユーラシア大陸、

アフリカ大陸、アメリカ大陸などが出来たとされています。

◇ここで、話を日本の誕生頃に絞っていくことにします。

- ・マンツルの動きによって、太平洋の中央部、ハワイ島付近から湧き上がってくるマンツルは、東西に拡がって行き、東へ行ったのはアメリカ西海岸の下に潜り込み巨大地震の発生源になっています。
- ・そして西に移動したのが、太平洋の底を作り“太平洋プレート”として日本に向かって動いています。
- ・その“太平洋プレート”は、中国やロシアの大地を形成しているユーラシア大陸と衝突し、その下に潜り込んで行きます。それが“千島海溝”や“日本海溝”です。
- ・その時と言っても地質学的時間なので、何千万年とか何億年と言う単位なのですが、大陸の縁を捲き込み折り取ってしまったのです。まるで棒状の太いチーズを折り曲げるとき、大きく<sup>ひび</sup>輝が入って割れて行きます。この折り取られた部分が日本列島の原形なのです。主に西日本部分が海上に出て、東日本部分はまだ海の中でした。

- ・その後も衝突が継続しており、折り取られた部分が<sup>しわ</sup>皺として盛り上がり東日本が隆起した。

◇太平洋プレートは、東西ばかりでなく、南へも押し出していて、フィリピン海プレートと衝突して、強大な圧力で、フィリピン海プレートを南西に押し付け、その結果まるで大福餅を踏み付けたように<sup>こ</sup>餡が北方に飛び出してしまったのです。

- ・飛び出したフィリピン海プレートは、東へは太平洋プレートが邪魔をして行かれないのでそのまま、火山列島となって、北進し、原初の日本列島へぶつかって行ったのです。
- ・丁度、西日本と、東日本の隙間に雪崩込んできたのです。
- ・日本の大きな構造線の一つ、中央構造線は、元々日本がまだ大陸の一部であった頃、当時の太平洋プレートが大陸に迫りその下に潜りこみつつある時、海の底としての沈殿物質を大陸プレートの刃で<sup>こそ</sup>刮げ取るようにして、溜まっていたのです。

つまり大陸の地質とは、異なる海の砂礫の層が、中央構造線として。九州の中央部から、四国の真ん中など、西日本の南部を東西に伸びています。しかし、この中央構造線は愛知県付近から大きく北へ曲がり、長野県付近から再び南下して山梨県、埼玉県を経て千葉県にまで達しています。

◇ここでの問題は、大きく北に屈曲している原因は何かと仰うことです。

飛び出した餡のようなフィリピン海プレートが、西日本地塊と東日本地塊の間に割り込んで来たのです。

- ・その衝突のため、北アルプスが出来、中央アルプスが作られ、南アルプスも皺として高い山々になって行き、更に、凄い圧力のため地下にある水が周囲の岩を溶かした熔岩は、地表に噴き出し、古御嶽山、八ヶ岳、富士山、箱根山、伊豆半島、大島、三宅島などの伊豆火山列島をつくり、日本に衝突し続けています。最近では西之島で大噴火が起きています。
- ・これまで北に向かっていたフィリピン海プレートは、大陸のプレートと太平洋プレートに挟まれて、行き場を失い、ある時から北西に進路を変えざるを得なくなりました。

- ・ここまでの話で日本列島の大体の形が出来てきました。
- ・しかし、まだ関東平野や千葉県は、出来ていません。

## 《関東平野、及び房総半島の誕生》

◇話の範囲を更に絞って見ます。

- ・伊豆半島の東側、熱海、小田原から江ノ島、三浦半島、そして館山は、ほぼ一直線に並んでいます。これは、フィリピン海プレートが、北に向かって圧していた頃に、皺として、隆起し、盛り上がったからなのです。江ノ島は典型的な断層隆起で島になったのです。

◇この当時は、まだ関東平野は海で、房総半島の東側には何も無く、まるで“箕”という、

片側の無い箕ざるのように開いていました。すると、箱根や富士山に降った雨によって削られた土砂は、海に流れ込んでも、そのまま東の海へと流れ去り、日本海溝の深みへと沈んでしまいます。

◇丁度その頃、前に書いたようなフィリピン海プレートの進路変更があったのです。

- ・この進路変更は日本に於いて大変重要な転機となりました。つまり、北に向かっていた、フィリピン海プレートが急に、北西へと向きを変えたのでした。
- ・その圧力は、海の底にあった固い岩盤を隆起させて、今の屏風が浦の崖になりました。屏風が浦の位置が隆起したため、関東平野部分の海は“箕”の形ではなく、“お碗”の形になり、山から流れてきた土砂は、東の海に流出せず、どんどん堆積して行き、隆起も加わって関東平野や房総半島が出来てきたのです。

- ・今でも房総半島は隆起し続けています。千葉県の東南海岸に見られる海岸段丘が証拠です。

◇千葉県館山市近くの崖観音の裏の崖に見られる地層も、ここが昔は海の底で堆積した泥や砂が地層になったということです。

## 《チバニアンの本題》

◇小さい頃、理科の実験で、砂鉄を紙の上に置いて、下から磁石を近づけると、鉄の小さな針が、同じ方向に並んでいくのを知っているでしょう。

- ・N極とS極の間が近いと、その間は輪のようになってしましますが、地球のようにN極とS極の間の距離が遠いと、鉄の針は、真っ直ぐに並びます。

◇では、千葉県が出来る過程を考えてみます。

- ・最初は海の底だったから、山から流れてきた土砂と共に、地表に混じっている鉄の細い針状の結晶も流れてきて、細かいのでゆっくりと海底に沈み堆積していきます。
- ・その時、地球の磁場によって同じ方向を向いたまま堆積していき、次から次へと降り積もってくる土砂の下に地層を作って固まっていきます。

◇前に書いたような地磁気の変化は、丁度、その時に海の浅い所に堆積していった鉄の微粒針状結晶の方向を一定にしたまま固まり、堆積岩となります。

- ・つまり、海で出来る堆積岩の地層には、鉄の微粒子がその時の地磁気の変化を記録したまま堆積していることになるのです。

- ・遠い昔の地層などは、融けたり、崩壊して無くなりますが、それでも時には地磁気が反転した時代の地層が、隆起によって地表に現れ、発見されることがあります。

◇これこそが、『チバニアン』として、日本の千葉県の中央部、養老川の河岸で発見された

非常に珍しい地層だったのです。

特に珍しいのは、**地磁気が逆転した両方の地層が同一地点で確認出来たこと**にあります。

◇地磁気の逆転や、磁極の移動は、地球の歴史上、十回以上あったと考えられています。

- ・その中でも最も新しい、地質年代の地層が、偶然に千葉県の養老川の崖で発見された。
- ・更に、これ又偶然に、丁度その年代の名称が地質年代表に確定していなかったのです。
- ・そこで、初めて、日本の地名を取り入れた『チバニアン』時代と言う名称が、年代区分として、登録されたのです。
- ・この同じ時期の地層は、イタリアにもあったそうですが、国際会議で数年間も議論討議され、『チバニアン』時代と決定したそうです。

#### 《日本列島の形成と、房総半島の成立》

- ・丁度、地殻下流体の動きが変動して、日本が大陸から引き千切られて太平洋に動きだした後、ユーラシアプレートと太平洋プレートが衝突して潜り込む隙間にフィリピン海プレートが引き摺り込まれて西日本地塊と東日本地塊との間に流れ込んで来た頃、古御嶽山の巨大噴火による火山灰は、遙か太平洋の海底まで降り積もり地層となった。

この白い層を(白尾凝灰岩層)と言う。

- ・その頃は、地球の磁場も変動期にあり、火山灰中の磁性物質は、その時の磁場に対応した方向で、海底に沈降堆積し岩石化して行った。その後、フィリピン海プレートの圧力で、富士山・箱根・伊豆半島・伊豆七島などが順次、陸地化して行く。太平洋プレートの圧力も加わり、房総半島も隆起して、現在のような日本列島が形成されてきたのです。

#### 《地質年代》

- ・**地質年代**とは、46億年の地球の歴史を、当時の生態系や気候変動などを基に115に区分したもので、大きな区分では、恐竜が繁栄した「ジュラ紀」や「白亜紀」などが有名です。
- ・他に**年代層序**という区分があり、これは地層の成分や磁気などの研究から年代を分類。
- ・ユネスコのもとにある国際地質科学連合は、各時代の境界となる最も代表的な地層・地点を「国際標準模式地」として1ヶ所だけ選ぶ。「国際標準模式地」に選ばれれば、その地名に因んだ地質年代を、その国で命名することが出来て、「黄金の杭」を意味する「ゴールドenspайク(金鉋)」と言う青銅製の銘板が現地に打ち込まれます。
- ・小さな区分は名称が未定のものがあり、今回の年代は、ネアンデルタール人が生きて

いた時代であり、地質年代で言うと「**第四紀 更新世の中期**」に当たる。年代層序で言うと「**第四系 更新統 中部**」と表現が変わる。この時代は氷河期と間氷期の繰り返しが顕著であった。大型哺乳類のマンモスやサーベルタイガーが生息していた。

### 《チバニアンが注目される経緯》

- ・千葉県市原市 田淵1898は、房総半島の中央部、千葉セクションと呼ばれる240万年前～50万年前までの地層が観察出来る地域の中でも、地球の磁場逆転の最後の地層が確認出来た稀少な場所で、小湊鉄道線と県道81号線の間挟まれた、蛇行している養老川の崖で発見された。
- ・この崖の数十ヶ所で、方向や位置を精密に記録したサンプリング(資料採集)を行い、研究所に持ち帰って、その岩に含まれる磁鉄鉱などの残留磁気を測定した。その結果そこは、地磁気が逆転していた時期《**78万1000年(約77万年前[菅沼説])～12万6000年前**》の中で、特に地球のN極とS極が最後に逆転した痕跡を示す地層が、直接観察出来る場所として、更新世 中期に属するが年代名称が未定の時期であった。
- ・境界より上の新しい年代の名前は「境界付近の地名に由来することが好ましい」とされ、日本の研究者グループが「**チバニアン(千葉期)**」と提案した。
- ・地磁気逆転の痕跡は、過去360万年の間に11回逆転したと考えられ、更新世前期のカラブリアンと中期「**チバニアン**」の境界(GSSP)を、存在していた<sup>びやくび</sup>白尾凝灰岩層の火山灰層を基底として、地磁気最後の逆転を示す地層の境界が明確に判る証拠とされる。
- ・国立極地研究所の菅沼悠介准教授らは、この千葉県市原市にある地層の堆積物を分析し、<sup>びやくび</sup>白尾火山灰層は77万年前に御嶽山が噴火した時の火山灰で、地球磁場のN極とS極最後の逆転が、77万年前だった証拠を発見し、2015年に発表した。<sup>びやくび</sup>白尾からByk-Eと名付けられている。国際標準地となる可能性がある。(2017年)
- ・中期更新世(Middle Pleistocene)は中部更新統とも呼ばれるが、先行するカラブリアンと中期更新世との境界は、地球史上最後の地磁気逆転期であった、松山ーブリューンヌ逆転の起きた時期でもある。言い換えると更新世の前期と中期の境目でもある。
- ・これを示す国際標準模式層断面及び地点の候補は、次の3ヶ所の地層が挙げられている。
  - ◇千葉県市原市田淵の養老川沿いにある「千葉セクション」
  - ◇イタリア・バジリカータ州マテーラ県の「モンタルバーノ・イオーニコ セクション」
  - ◇イタリア・カラブリア州クロトーネ県サン・マウロ・マルケザートの「ヴァレ・デ・マッケ セクション」
- ・最後の逆転層の確認により、この成果を踏まえて、2017年6月に極地研や茨城大などの、22機関の研究者グループは、「千葉セクション」が模式地に相応しいと、国際地質科学 連合の専門部会・国際層序委員会に提案した。

つまり、この境界で区分される新たな地質時代を「チバニアン」とする申請を出した。

・イタリアも南部の2ヶ所を「イオニアン」と申請したが、専門部会9ヶ国16人の投票で11人が「チバニアン」に賛成した。但し正式決定は2018～2019年になる。

正式認定されれば、中期更新世という時代は、「チバニアン」と命名される。

・参考までに、房総半島の中央部は「千葉セクション」と呼ばれる地層で、その中でも田淵の付近は、上総層群国本層中とされる。因みに房総半島の根本の西側・東京湾寄り は下総層群で東側の太平洋側は完新世の時代となる。また、千葉セクションの南側は 三浦層群が接し、それより南の先端部は基盤が混在露出している。

・「チバニアン」とは、ラテン語で「千葉時代」を意味するもので、地質年代の名称に、日本に因んだ名前が付くのは、初めての快挙となる。

・この崖からサンプリングした穴の跡に、着色した杭を打ち込み、判り易いように表示。

◇緑色杭…地磁気が現在と同じ磁場であった地層(上層部)…………… B y k - B

◇黄色杭…地磁気が不安定な時期 (中層部)…………… B y k - C

◇赤色杭…地磁気が逆転していた時代 (下層部)…………… B y k - E

※この他にも、この地域の最上層部として、A層や中層と下層の中間にD層があるが、ここでは、見る事が出来ない。

◇2018年1月21日、研究熱心な公益社団法人 日本会の会員達は、この話を聞いて、

直ぐに、現地を確認する研修会を実施した。

・更に同年2月22日、「チバニアン」申請に関わった地元の地学の先生、堀内正貫氏を 神楽坂に招き解説を依頼。研究会を実施した。(堀内正貫氏の資料から補足)

◇尚、少し個人的なことになりますが、「日本会」という会は、日韓国交正常化でノーベル 平和賞を1974年に日本人で初めて受賞したり、1965に沖縄返還交渉を開始(沖縄の復帰 実現は7年後の1972年で、2022年5月15日は丁度復帰50年目に当たる)など、華々しい

活躍をした、故・佐藤栄作総理の肝いりで、旧・大蔵省出身者を中心として作った公益社団法人で、主に海外からの留学生・研修生の受入業務に当たっていると聞きました。

この日本会で発行する冊子『総調和』は全国の政治家や各地の首長クラス、大学教授、経済・政治学者などに愛読者が多いと聞きました。主にその時の世界情勢や金融事情、環境問題など各種の提言・エッセイなど、多くの知識人が寄稿してきた冊子です。

私は日本画を描いていましたので、この冊子の表紙絵に何度が取り上げて頂き、その縁で、チバニアンの現地見学を行いました。殆どの方は、このような地学的な知識を持っていなかった為、私が解説者として寄稿(194号)したり勉強会を開かせて頂いたのです。

◇そして、2022年の第81回 日本画院 展に、遂に「チバニアン追想」という題で、250号 の絵を描くことが出来ました。

しかし、実際の現地は、単なる河岸の崖があるだけで、焦点となるものが何も無いのでこんな場所を絵にするには非常に苦労しました。ですから、この絵は写生では無く、その時の印象をデフォルメして、追想としました。実際は、川の崖が50mにも長く延び



ているだけで、足元は泥濘み、崖の上からは木々が覆い被さってきて、川ですから、石などがゴロゴロとしている場所です。絵画的・観光地的な雰囲気は全く無い所ですが、地学的には、大変貴重な場所だということです。

◇チバニアン(英語名：Chibanian)は、地質時代の区分の一つとして、

78万1000年前～12万6000年前までの期間である。

・2020年1月17日：国際地質科学連合により、この時代区分の名称を正式に

『チバニアン(千葉時代)』と決定した。以上。

## 【チバニアンの“チバ”の名の由来】

### 《古代》

◇古代地名語源では、“端”の意味「ツバ」⇒「チバ」に変化。

- ・[台地・崖地の端⇒地の端]が起源⇒「チバ」。
- ・「崩(ツバ)える」…崩壊地形の意で「ツバ」⇒「チバ」に変化。
- ・海に面した泊り場(船が風待ち・潮待ち・時化除け)…「トバ」説(三重県鳥羽市など)  
[泊まり場]が起源⇒「トバ」⇒「チバ」に変化。

### 《平安時代》

◇中世には、千葉庄・千葉荘という名の荘園があった。

- ・千葉町は、千葉郷が前身で、古代千葉郡になった。

◇千葉氏は、平安京を造った桓武天皇の血を引く「桓武平氏」の一族で、平安時代末期に下総の国、千葉庄に発生。中世の房総半島を中心に、室町時代末期までの約四百年間も栄えた。

- ・千葉泰胤を祖とし、奥州千葉氏として栄えた。

チバ氏の名前は岩手・宮城に多いが、“チ”…知・智・地。“バ”…羽・場・馬・葉・者・盤の

組合せで各種存在する。「チバ」の後に、山・崎・原・井・東・桜などが付く。

- ・千葉氏の家系には、通辞「胤」が入る。

◇平 忠常の子孫・常長が、千葉市緑区に本拠。⇒千葉市中央区亥鼻(猪鼻)に移住。

◇保元の乱(後白河天皇vs崇徳上皇)でも千葉常胤は源 義朝方に付いていた。

◇平治の乱で義朝方が敗死の後、常胤が義朝の大叔父の息子・頼隆を養育するなど浅からぬ縁があった。

### 《鎌倉時代》

◇治承4年(1180)、源 頼朝が平氏打倒と挙兵した時、千葉常胤は市川市国府台の平家方の代官を討ち、源氏軍の一員となった。

- ・源 頼朝が石橋山の戦いで敗れ、安房に逃避、千葉常胤に助力を求めた。

- ・千葉市と鎌倉市の町造りが似ている(北端の寺社、南北に大道を造営)…常胤が鎌倉建設に献策したとの説もある。
- ・千葉氏は、千葉氏と上総氏の二系統に分かれ、各地に勢力を拡げた。
- ・その後、千葉常胤の7人の息子は、夫々、千葉氏・相馬氏・武石氏・大須賀氏・国分氏・東氏(千葉六党)と田城寺氏の祖となり各地で栄えたが、秀吉に攻略された後、帰農した。

◇2022年のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」にも、この時代の武将の名が何人も出てきます。

◇明治6年(1873)6月15日、印旛県+木更津県⇒千葉県。千葉郡+千葉町に県庁を設置。現在は千葉県として、一ヶ所の県庁所在地になっている。

◇このように、「チバニアン」の“チバ”には、歴史上の深い意味があり、今度は、地質学上の時代区分名称として、“チバ”の語句が入った『チバニアン』は、世界中から、

注目されることになったのです。

梵蔵たかちゃん(高田俊一)

記